

1. 教育事業名 「無人島アドベンチャーキャンプ2018」
～協働、挑戦、感謝 君の夏～
2. ね ら い 「不便」「不足」「不自由」な厳しい生活環境の中で、仲間達と助け合いながら対峙する困難を乗り越えることで、協働や挑戦することの大切さを学ぶとともに、自然、家族、仲間への感謝の念を育むことができる。また、無人島で「生きる」技能を学び、その実践を通して自信を持たせることで精神的な自立を促すことを目的とする。
3. 期 日 平成30年7月23日（月）～7月29日（日） 6泊7日
4. 場 所 国立沖縄青少年交流の家キャンプ場 儀志布島
5. 募集定員 24名
6. 参加人数 24名
7. 参加者内訳 小学生12名、中学生12名（男子12名、女子12名）
（県内23名、県外1名）
8. 講師等
- ・大城 敏 氏（パドリングガイド漕店代表）
 - ・森 有紀子 氏（読谷村観光協会）
 - ・東江 宗典 氏（潮花キッズクラブ代表）
 - ・油井 貴紘 氏（沖縄県立名護青少年の家）
 - ・与儀 早紀子 氏
 - ・真栄城 守信（保健指導：ウォーターセーフティ協会代表理事）

9. 実施プログラム

月 日 (曜)	活 動 内 容			活動 場所
	午 前	午 後	日 没 後	
7月23日 (月)	〈渡嘉敷港へ移動〉 開会式 アイスブレイク	スノーケリング研修① 野外炊事研修 ビバークテント設営研修	班での話し合い 装備品パッキング ふりかえり	キ ャ ン プ 場
7月24日 (火)	大型カヌー研修 スノーケリング研修②	危険生物についての研修 大型カヌーで儀志布島へ 生活基盤づくり	ボンファイヤー ふりかえり 無人島での目標設定	儀 志 布 島
7月25日 (水)	班別活動 漁労活動、塩づくり	班別活動 漁労活動	ボンファイヤー ふりかえり	
7月26日 (木)	班別活動 漁労活動、塩づくり	班別活動 漁労活動	ボンファイヤー ふりかえり	
7月27日 (金)	班別活動 ソロ活動準備	ソロ活動	ソロ活動	
7月28日 (土)	班別活動 ソロ活動ふりかえり 漁労活動	班別活動 漁労活動 分かち合いの集い準備	分かち合いの集い	
7月29日 (日)	機材撤収 渡嘉敷島へ移動（船） 機材片付け	閉会式 アンケート・感想文記入 〈那覇泊港へ移動〉	無人島キャンプ報告会 ～解散～	キ ャ ン プ 場 那 覇 市 内

10. 事業の様子



大型カヌーで無人島をめざす



食べるために火を起こす



竹竿を用いて釣りに挑戦



釣った魚をさばく



ブルーシートに包まって眠ります



班員輪になつての食事



ボンファイヤーでキャンプをふりかえる



無人島からの撤収

11 エピソード（アンケート・参加者の感想）

- ・なかなか火を起こすことができなかった。普段の生活の便利さを実感した。
- ・遠く離れた本部から水を運ぶのが重くて大変だった。大切に使うようにした。
- ・互いにアイデアを出し合い、班の活動できた。
- ・仲間と協力し、1週間を乗りきることができた。
- ・魚釣りや火おこし等ができるようになり、自信がついた。
- ・1週間の無人島生活を乗りきることができ、自信がついた。
- ・水や電気、家族の大切さを知った。
- ・途中でじけそうになったが、仲間励まされ、最後まで頑張れた。
- ・班全員で力を合わせて頑張ることができ、色々な面で成長できた。
- ・無人島ならではの体験ができてよかった。
- ・ソロ活動は、寂しく、心細い思いだった。
- ・楽しいこと、苦しいこと全部含めていい思い出になった。
- ・協働や挑戦することの大切さを学んだ。
- ・日常の便利な生活が多くの人々の関わりで成り立っていることを実感した。

12 担当者所見

（1）成果

- ・三不（不便・不足・不自由）のコンセプトの下、「困難を乗り越える体験」を重視したプログラムとして募集したことで、多くの参加者が、厳しいキャンプに臨むという心構えができており、全日程を通して意欲的に参加することができた。
- ・仲間と協働し困難を乗り越えていく体験を通して信頼関係を深め、互いに意見を出し合い、より良い無人島生活づくりに励んだ。
- ・無人島という厳しい環境での共同生活を通して、協働や挑戦することの大切さを学んだ。また、自然、家族、仲間のありがたみについて気付くことができた。
- ・全ての班で海水を用いた塩作りを行うことができた。班内のコミュニケーションが促進された。
- ・前年度できなかったソロ活動を実施した。自分や家族、仲間等についてじっくり考えるいい機会であった。ふりかえりでは、家族や仲間への感謝、便利な日常生活のありがたさ等の言葉が多く出た。
- ・時計を所持しない生活の中、太陽高度や潮の干満等の自然の事象、定期船往来のタイミング等を目安にして班の生活リズムをつくることができた。
- ・天候に恵まれ、計画していた全プログラムを実施することができた。1週間の活動を通して各参加者にこれからの日常生活への自信が生まれた様子である。
- ・各班のカウンセラーとの事前協議で今回のコンセプトである協働、挑戦、感謝について説明を行い、それを意識しての活動を促した。ふりかえりでは、子供達の意見の中にこの言葉が多く現れていた。

（2）課題

- ・事前の実地研修等を行い、各カウンセラーの持つ技術の共有や実際の指導に関する共通理解を図る場が必要である。
- ・前年度に引き続き食材を精選してキャンプに臨んだが、過分が生じたため漁労活動の必要性が高まらず、後半は意欲的な漁労活動につながらない班があった。食材の量と内容については十分な検討が必要である。
- ・装備品の活用力を高めるため、その精選、各班によるパッキングを行ったが、必要装備品の取り忘れや紛失があった。事前の周知と定物定置の指導強化を図る必要がある。
- ・カウンセラーや施設ボランティア等、スタッフの確保と育成。